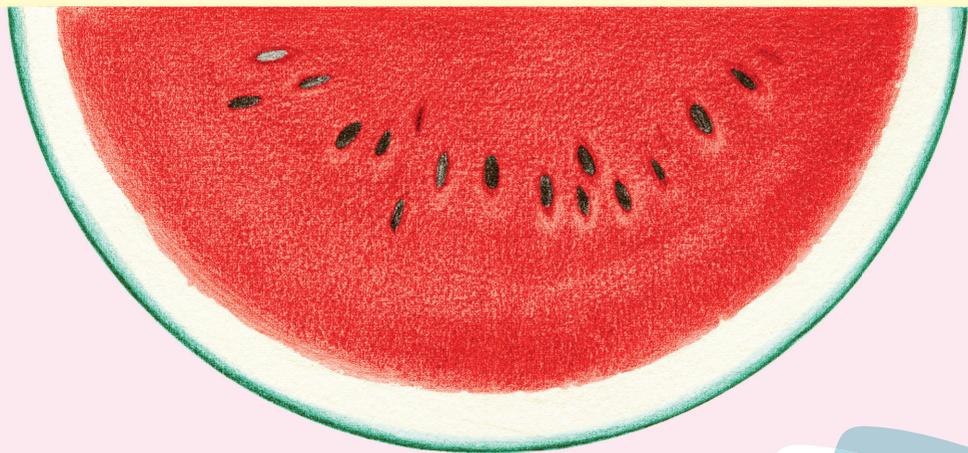


禅の友

—Zen no Tomo—

8

August 2021





ご本山だより
大本山永平寺【夏安居解制】



「安居」とはお釈迦さま以来連綿と行われている大切な修行です。正しくは「九旬安居」といい、一カ所に僧侶が集まり九十日間（九旬）修行を行うのです。

また、安居が始まる際は修行中の色々な制約を結ぶことから「結制」と呼ばれ、安居が終わる際は制約が解かれることから「解制」と呼ばれます。

安居の始まりは、お釈迦さまご在世の頃、夏の雨期になると草木が生い茂り、小さな生き物も活動的になることから、無益な殺生を防ぐ為、また托鉢など屋外での修行が難しくなる為に一カ所に集まり修行をされたことからと伝わっております。有名な祇園精舎はお釈迦さまが安居修行をされた場所の一つです。また、仏教の伝来とともに中国や日本にこの安居修行が伝わり、夏だけでなく冬も行うように

なつたとも伝えられております。

大本山永平寺では五月中旬から八月中旬と、十一月中旬から翌年二月中旬までの各三カ月間、安居修行をいたします。夏の安居修行は夏安居、また雨安居と呼ばれ、冬の安居修行は冬安居、また雪安居とも呼ばれています。日本各地や時には諸外国から、永平寺での安居修行の為に沢山の修行僧が雲の如く、水の如くに集まります。そして、何度かの安居修行を経て、それぞれの修行僧は次の修行道場へと移っていくのです。

この安居修行を共にした仲間たちとは、まさに「同じ釜のご飯をいただいた」仏道の友です。それぞれは、教える側と教わる側、先輩と後輩、また歳の多少などはありませんが、共に頭を剃り、共にお袈裟をかけて坐禅をするかけがえのない仏なのです。

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三二〇二



ご本山だより 大本山總持寺

【更さらに山よりも高き山あることを未いまだ知らず
『伝光録』第四十八祖天童宗珥てんどうそうやく禪師章

大本山總持寺

☎〇四五・五八一・六〇二二



葉月八月、本山ではほとんどの修行僧しゆぼうじが師寮寺しりょうじ（師匠のお寺）補佐たで他出た（帰省）します。特に今春上山した修行僧にとっては初めての他出であり、日々の修行で成長した姿をお師匠さまやご寺族、檀信徒の方々に見ていただく絶好の機会なのであります。

ワクチン接種も徐々に進んではいますが、未だ収束すら見ないコロナ禍ではありますので個々が責任ある行動で無事に本山へ戻ってくることを願うのみであります。

さて、去る六月二日は横浜港の開港記念日に当たり「第四十回横浜開港祭」が開催されました。今年は感染症対策を行った上で開催を決定。初の試みとして横浜市内の全十八区でシートレット花火の一斉打ち上げも行われ、

本山境内も会場となりました。「賑わいの創出が激減している横浜市の全の皆さまに笑顔になっていただきたい想い」「医療従事者に向けての感謝の想い」「新型コロナウイルス収束の想い」の三つの想いを込め、全十八区同時に花火を打ち上げました。三密回避のため、具体的な打ち上げ場所は非公開となりました。特に医療従事者にとっては大変な犠牲を払い全身全霊で看護に打ち込む姿を思う時、私たち修行者も毎日を無駄なく限らない仏道を進んで行かなければならないことを心に誓わなければなりません。標題の「更さらに山よりも高き山あることを未いまだ知らず」とは日々の努力の更さらにその上の段階があり、それが向上の一步となると教えているのです。

選・坊城俊樹

うろくづのねぶりを覚ます卯浪哉

北海道 堺 隆

評 「うろくづ」は「鱗」、「ねぶり」は「眠り」という意味。古語的な格式ある言葉を使うことによって、海の神と春の海の生き物たちの目覚めの様子が見えてくる。そしてその海底にはこの海に居る様々な魚たちが、いよいよ卯浪の訪れを待っているのだ。

しんせいをくゆらす父の麦の秋

大阪府 花谷 広文

評 「しんせい」は近年生産が終了したレトロ口な紙巻き煙草である。黄色いパッケージは戦後の日本の復興を願い、「新生」と命名された。「くゆらす」という動作が嘗ての父の面影と重なる。「麦秋」という美しい季節にはかならずどこかに「追憶」というものが潜む。

◆ くり言は聞き流すもの籐枕

大阪府 廣田 静子

◆ おでましのなき扇風機首傾げ

静岡県 石濱 徹

◆ 炎天の影先に乗る路線バス

秋田県 小田嶋 恭葉

◆ 宍道湖に続く植田の水鏡

島根県 藤江 堯

◆ やがて往く世に道連れや穴子食ぶ

埼玉県 小林 茂之

◆ ほととぎす胸の重しのとれてより

宮城県 高橋 静子

◆ 暮の春白く小さき母の顔

東京都 國領 みどり

◆ 夏の雲動かぬ如く流れゆく

埼玉県 志村 孝

◆ 風薫る里を奏る草刈機

岐阜県 伊藤 和代

◆ 親亀の背に小亀乗ることもの日

大阪府 岡 恭介

選者吟

喧嘩して赤い傘干し虹を待つ

俊樹

作句小見 女性が恋人と喧嘩をしたのである。帰りの道は雨だった。その二階建てのアパートの廊下に彼女は赤い傘を開いて干した。ちょうどそのころ、西の空に虹が架かった。いや、架かったかと思つた。彼女はいつまでもその空に虹が架かるのを頬杖をついて待っていた。

選・長澤 ちづ

はつ夏の空の青さに息つきて地上の今を
しばし忘るる

福島県 大槻 弘

評 「息をつく」とは息を吐くこと、ほっとすること。そんな言葉本来の意味を思わせる一首。「はつ夏の空の青さ」のシンプルさの所為せう。「地上の今」はなかなか終息に至らないコ
ロナ禍を思わせ含らみがある。

畦走り苗運びする予らはなく田植機直に
田の面を走る

鳥取県 眞山 博充

評 昔は子どもたちにもしっかりと役割があつて農作業は家族全員でする一体感があつた。機械化により人手が少なくて済むようになったが失うものもあると然りげなく思わせる。

- ◆ 堰提の水は田毎に満たされて空の夕映え置かぬ田はなし
岩手県 関合 新一
- ◆ 海の辺に嫁ぎて夫と真夜に聴くらしい海鳴りの香
静岡県 杉原 民子
- ◆ 懐かしい「鐘の鳴る丘」よみがへるさうだここには映画館があつた
三重県 西村 廣視
- ◆ つんのめるやうに相方の腕に入りルンバを踊るリズムに合はせ
山口県 濱田 道子
- ◆ はつ夏の金波銀波の博多湾山下清の絵を見るごとし
福岡県 三吉 誠
- ◆ 訪ねたる村人の家に山羊の乳搾りたてぞと振舞はれたり
東京都 長谷川 瞳
- ◆ 蓮の田の新芽水面を覆いたり空雲映す隙間なくして
愛媛県 泉 敬子
- ◆ 常ならば車で過ぐる祠まえ今朝は徒歩なれば一礼をなす
広島県 徳永 進一郎
- ◆ 此の里に暮らす春の幸せは裏藪に鳴く鶯の声
鳥取県 徳本 義則
- ◆ 夏場所が終わり来場所番付を作る楽しみ半日かけて
奈良県 鈴木 重雄

選者詠

限りある時の船先に立つ踵いかなる星を
目指しゆくのか

ちづ

作歌小見

多くを語らずに手渡すものが豊かにあるのが短歌などの短詩形の世界と、皆さまの作品を拝見しつつ改めて感じました。活動が思うようにならないこの時代、社会的距離を保ちつつも心の交流としての詩歌の役割を思わずにはいられません。